機関紙じんけん　第 163 号　令和 4 年 (2022 年) 10 月 6 日 発行

じんけん

発　行
豊中市人権教育推進委員協議会
機関紙編集部会
(豊中市教育委員会事務局社会教育課内)
電話 06-6858-2580

令和 4 年度（2022 年度）人権作品募集入選作品より

巻頭言

八月がきたらではなく毎日考えたい

会長　青木　康二

8 月 18 日、人権平和センターでのテーマ「つないでいく記憶と記録」での豊中空襲とサハリン引き上げ被災体験語り会に参加しました。

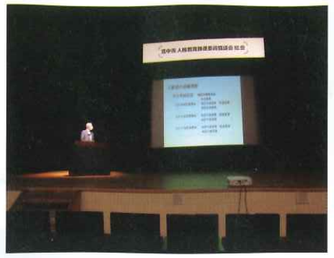
8 月 6 日「広島原爆の日」、玉井町 2 丁目第 2 公園に立ちました。1945 年 6 月 7 日からの玉井町空襲被害史実記録説明版を本年その日に豊中市が設置しました。6 度の空襲による 10 発の爆弾で家は吹き飛び、焼夷弾で一帯焼野原状態となり、多くの死傷者を出したとあります。その足で老人憩いの家南側に向かいます。本年 2 月 18 日に日本非核宣言自治体協議会（豊中市会員）活動のひとつとして植樹された「嘉代子の桜」（長崎で被爆した動員女学生への慰霊樹）2 本の苗木を見つめました。そして人権平和センター 3 階へ。昨年「平和展示室」が設置され、まさに「つないでいく記憶と記録」豊中初のコーナー。玉井町で発見された不発 1 トン爆弾の模擬弾や撃ち落とされた P51 戦闘機の翼、刀根山の爆弾池周囲の破壊し尽くされた民家集落の写真や、「ある兵士の手紙」コーナーも設置されました。

8 月 9 日「長崎原爆の日」、「今年 2 月 24 日、ウクライナに鳴り響く空襲警報サイレンは、あのピカドンの恐怖そのものでした」被災者代表の言葉です。ウクライナ作家の「戦争は女の顔をしていない」を読んだ人の一人は「通史的な本では、戦争の悲惨さは『死者 3 千万人』といった数値となるが、実際に死ぬのは、それまでの人生があり戦争がなければその後の人生もあった」と述べました。戦争とは、その人が大事にしている人生（生活も夢も家族も）すべてを奪ってしまうものだと痛感します。

いつまで続くのでしょうか。「もっと武器を、弾、弾、弾が足りない」「ロシアはあらゆる手段を持っている」、武器を投入すればするほど、戦争はますます長引き、より多くの民間人、両国兵士が死ぬことにつながる・・・8 月 18 日「つないでいく記憶と記録」の場での語り部は、「もう止めて！」と括られました。

私たち人権協も「自らの足でやることが今ある」と思いました。

★総会報告★



5月13日（金）アクア文化ホールにて令和４年度（2022年度）豊中市人権教育推進委員協議会の総会が開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響で３年ぶりの対面開催でしたが、93名の方々にご出席いただきました。昨年度の事業報告・会計決算報告・監査報告および本年度の活動方針案・事業計画案・予算案の提案が行われ承認されました。

総会では来賓の方々にご挨拶をいただきました。その中にロシア軍のウクライナ侵攻に関するお話がありました。豊中市でもウクライナの避難民の受け入れを行っている、日本在住のロシアの方に対する人権侵害が起きているという内容でした。一刻も早く人権が重んじられる平和なときが訪れることを祈るばかりです。

★総会後の研修会を終えて★

総会後の研修会では人権啓発ビデオ「夕焼け」が上映されました。中学２年生の主人公、瑠衣は家族のことは家族でするものだと思いこみ、幼い弟の世話や家事に追われる生活を送っていました。しかし、小学校時代の担任であり元ケアラーであった灯との交流によって、自分のおかれている現状や本当の気持ちを見つめ直し、将来に向けての一歩を踏み出すことができました。今の状況をしかたのない事だとする思い込みを『しかたのない事ではない、諦めなくていい』と、気づくことができれば、変えられることもあるのだと考えさせられたビデオでした。

ビデオの上映後、地区代表委員の活動の進め方や事務手続きの方法などが説明され研修会を終えました。

十七中校区常任委員　　加納　昌美

人権教育をすすめる市民の集い

（豊中市人権月間参加事業）

開催要項

主　旨　　豊中市人権教育推進委員協議会はすべての市民の人権意識を高め、より人権尊重の輪を広げるため「市民の集い」を開催します。

開催日　　令和４年（2022年）11月11日（金）
時　間　　13:00 ～ 15:30（受付12:30 ～）
会　場　　豊中市立アクア文化ホール

プログラム

意見発表　八中校区
記念講演　講　師　スマイリーキクチ　さん
　　タイトル　インターネットと人とのかかわり合い
　　～突然、僕は殺人犯にされた～

「人権教育をすすめる市民の集い」参加について

「市民の集い」に参加ご希望の推進委員の方は各地区代表委員または常任委員に直接お申し込みください。
一般の方は下記までお申込みください。　先着20人　申込締切11月９日（水）
手話通訳・筆記通訳・保育あり（保育は２歳以上。11月４日（金）までに要予約）

参加申込（問合せ先）

〒561-8501　豊中市中桜塚3-1-1
豊中市人権教育推進委員協議会事務局（社会教育課内）　電話　06-6858-2580　FAX　06-6846-9649

令和４年度（2022年度）　活動方針

新型コロナウイルス感染症がいまだに終息をみせません。非常事態宣言等が繰り返され、人権協の活動も一変させられました。とりわけ常任・地区委員の皆様のご苦労には感謝いたします。

感染拡大を配慮しての「市民の集い」でした。意見発表では、庄内南小学校長より「安心できる学校づくり」として、子どもの変化を見逃さない仲間づくり、一人ひとりが「守られ・頼られる」存在であり、「安心・生きる力」を手に入れることで、「未来に生きる子どもの育成」について報告されました。

記念講演は「生命の星」と題して造形作家の新宮晋さんの講演でした。風や水など自然エネルギーで動く立体作品に囲まれ、子どもらが自然や命の尊さを学びながら、生き方を考える場「地球アトリエ」構想を、地球の未来像として提案されました。その世界観は、世界のあらゆる国々を共に素晴らしい星に生きる「地球人」と捉え、アート（作品）はそれを成し遂げるメッセージだと唱えられました。

一方、ミャンマーでは軍事クーデターが起こり民主化の象徴とされるスーチー氏を監禁し、中国は香港の民主主義を揺るがし、ウイグル自治区の人権弾圧など、不当な干渉を続けています。そして、ロシア軍のウクライナ侵攻が始まり、にわかに自由で平和な日常が奪われました。どうして多様性を認め合う世界観に立てないのでしょうか。

今年は全国水平社創立100周年を迎えます。「一句は一句より強く一語は一語より感激しきたり、三千の会衆みな面（おもて）を伏せ慟欷（きょき）の声、四方に起こる」自らを部落民とし、そしてエタであることを誇れと呼びかけました。水平社宣言は、部落差別の根絶をめざす青年たちにより起草され、人々により運動は支えられてきました。

「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と結ばれる「水平社宣言」は、日本初の人権宣言とされ、社会のあらゆる人権問題の克服に向けた原点となってきました。しかし、今なお差別や偏見に苦しみ、憎悪や分断に心を痛める人々がいます。

人権協も平和で差別のないより良い豊中市の実現に向けて、改めて水平社宣言の精神からさらなる学びの一歩を刻んでいきましょう。

※慟欷（きょき）・・・すすり泣くこと

つなごう　つなげよう　人権の輪

一中校区推進委員　大谷 友紀

スマートフォンの普及で、インターネットがより身近なものとなった。その一方で情報発信の容易さや匿名性から自分に直接関係ない事柄でも、これまでの経験や思い込み、偏見から過剰に反応する人が増えてきているように感じる。その結果として起こる人権侵害は大きな社会問題ともなっている。無意識のうちに加害者とならないように、これらを使用する際は「不確かな情報は拡散しない！」、「冷静な判断ができない時は時間をおく！」といったことを意識していく必要があると思う。

子どもの頃の私に、母がよく言った言葉、“自分がされて嫌なことを他の人にしてはいけない”

今、同じことを自然と娘に言っている私がいる。

人権意識とは自分がそうされたらどう感じるかを考えることから始まると思うから…

十一中校区推進委員　中谷　祐加

人権協の活動を通し、今まで漠然としていた「人権」という言葉について、自分なりに色々と考えるきっかけをいただきました。重く難しい問題として、どちらかというとずっと避けてきた「人権」を、より身近なものとして意識できるようになったと思います。しかしそれを日々の生活の中で活かせているかというと、家族や身近な人へ発する言葉が独りよがりの感情に任せたものになっていたり、自分の一方的な思いの押し付けになっていたりします。気を付けようと頭では分かっているつもりでも、反省することばかりの毎日です。言葉の持つ責任の重さ、日常の言葉選びの難しさを今まで以上に感じています。

「人権」とは？…身近なもの。でも私にとっては今でもやっぱり難しいもの。まだまだ学びは続きます。

学校では今

豊中市立第十一中学校長　　浅田　勝利

ここ最近、集会ごとに生徒に向けて「想像力を働かせよう」という話をしています。こうしたらこうなる、こんなことを言ったら誰かが嫌な思いをする、だから言動を起こす前に想像力を働かせようと訴えています。

自分が年を取ったためか、校長という立場にいるからなのかもしれませんが、感情に任せた行動であったり、口から発してしまった後のことを考えてなかったりといったことがあります。まだまだ未熟な生徒だけでなく、大人どうしでも以前よりも多く遭遇するようになった気がします。みんなが自分のことで一杯一杯なのか、言っておかないと損をするように感じてしまっているのか、あるいは批判的にものが言える良い時代になった証なのかといろんなことを考えてしまいます。

想像力は、共感と切り離せない能力です。他人に降りかかる事柄を自分ならと感じることは、行動に対して「人としてどうなんだ」という自制や自省につながるはずだと思っています。

他人ではないのだからわかるはずはない、自分と他人とは違うからそう感じるとは限らない。確かにそう言ってしまえばそのとおりかもしれません。世の中に起こるさまざまな事案を見る限りでは、人と人とが真に分かり合えることは無理なのかもしれません。

しかし、理解しようとする志向や想像力は、人が人である限り放棄せず鍛え続けなければならないことだと、今こそ訴える必要があると考えています。

基礎講座①②を受けて…

①豊中人権協のあゆみと今後の課題
元豊中市教育委員会人権啓発指導員　新堀 祥一

②全国水平社 100 周年を迎えて
豊中市人権教育推進委員協議会事務局長　西田 益久

6月、基礎講座①②が開催されました。リアル・オンライン同時開催で多くの方が参加されました。基礎講座は、はじめて人権協の推進委員になった方を対象に開催される講座です。

①では、人権協のこれまでのあゆみや今後の課題についてのお話、②では、被差別部落の歴史から現在多様化する人権問題についてなど、一つひとつ考えさせられる内容で、正しく知ることの必要性を改めて感じました。

書記　福田　みどり

編集後記

新型コロナウイルスの感染拡大は「第7波」を迎えました。この間、多くの人々が不安を感じています。その中でも、第104回全国高校野球選手権大会が甲子園球場で開催され、3年ぶりに観客の入場制限を設けずに開かれ参加49校が、17日間にわたり熱戦を繰り広げました。そしてお盆には帰省先や行楽地へと、人々はそれぞれの思いを込めました。

私たちの活動も行動制限を気にしない、研修会や地域活動へと向かいたいものです。

最後になりましたが、「じんけん」163号発行にあたり、ご執筆・ご投稿いただきました皆さまに、心からお礼申しあげます。

書記　清水　千緋